

現代英語教育における成功のカギとは何か -高等教育機関におけるインプット理論の援用-

ジュリアン・セイント*、市川研**

What Are the Keys to Success in Modern English Language Teaching? -Applying The Input Theory in Higher Education-

Julien SAINTE*, Ken ICHIKAWA**

概要

現在、日本の学校英語教育だけでは学生たちが将来的に国際的人材として求められるレベルの英語力習得に至らないのが現状である。本稿では学生への英語授業に関する調査や英語教育の現状分析を概観し問題点の精査を行った。その結果、英語授業時間数の不足、授業以外での学習機会の少なさ、インプットを軽視しアウトプットに重きを置きすぎている教育の現状とそれに対する教育者自身の問題意識の欠如が課題として明らかになった。それらを改善し、学生の英語力向上を図るための具体的方法として、インプット理論に基づいた英語授業時間の倍増、英語課外活動の拡充などを提案する。

Keywords: 日本の英語教育改革, 英語教育研究, インプット理論

1. はじめに

グローバル化が進む現代社会において、英語力は国際社会で活躍するための重要なスキルとされている。しかし文部科学省は長い間、大なり小なり英語教育改革を継続的に実施してきたにもかかわらず、その効果は明確ではなく具体的な解決策もほとんど打ち出されていない¹⁾。主な原因としてはまず英語と日本語は言語学的に離れた言語同士であり習得が難しいこと、そしてそもそも日常生活において特段英語を使用しなくても生活できてしまうことが根底にある。教室外で英語を使う機会が限られている現状では解決は難しいであろう。もちろん大学などにおいて英語での研究発表や論文作成が求められることがあるが、実践的な場面

で英語を使う機会が限られているため、教材や教授法の質にかかわらず、英語力を高いレベルに伸ばすことは現状では困難と思われる。本稿では、日本の高等教育機関における英語教育の現状を、筆者らの見解に基づいて検証し、建設的批判を行う。そして学生の英語レベル向上に関して直面する課題を考察した後将来への提案を提示する²⁾。

2. 英語教育の現状と課題

最初に日本の学生の英語力を TOEIC の平均点から評価してみたい。これはIPテストであるが、その結果からおおよその英語力を知ることができると考えられる。高専の平均 TOEIC スコアは 377 点、専門学校は 468 点、短期大学は 405 点である。大学生の平均 TOEIC スコアは 455 点、全大学生は 474 点である³⁾。

* 香川高等専門学校 一般教育科

** 豊田工業大学

これらのスコアは将来の日本企業の基準からすると比較的低いと思われる⁴⁾。また、「将来のビジネスパーソンにとって重要な知識・スキル」「社員・職員に不足しており、今後強化する必要がある知識・スキル」のいずれの項目でも、英語が第1位となっている⁵⁾。このことは日本の若者が十分な英語力を身につけていない可能性を示唆している。一般的に、高校レベルまでの文法、語彙、読解力の基礎が身につければ、TOEICのスコアで600程度は達成できると言われている。逆に600以下は英語力を伸ばすために必要な基礎的な英語力が不足していることを示している。また、データに頼らなくても英語教育に携わっている教員の中で学生たちに十分な英語力が備わっている、と即答できる人がどれほどいるであろうか。例え肯定できても、英語教育政策を日本全体で考えて具体案を提言している教育者や英語教育研究がどれほど存在しているのだろうか。

また、同じEFLの諸外国では成功しているが日本だけ英語力が低い、などという言説もあるが、教育制度や学習環境も違う他国との比較はあまり意味はない。日本での教育環境を踏まえて改善策を探るしかないであろう。

もう一つ考慮すべき点として日本の高等教育機関における英語教育に学生が現状に満足しているかどうかも重要である。筆者らは過去に行った調査⁶⁾（高専、工学部、外国語学部が対象）の結果を見てみると、学生たちはかなりの割合で現在の英語の授業に対して不満を抱えていることが分かる。さらに、自由回答欄に記入してもらった英語の授業に対する意見を回答が多い順にみると、まず否定的な意見としては、「そもそも英語があまり好きではない」「英語を学んでもすぐに忘れてしまう」「将来英語を使うかどうかわからない」などが挙げられた。「その他」の意見としては、「言えない」「わからない」「答えたくない」といった回答が多かった。続いて肯定的な意見の内容を見ると、学生が英語の必要性を認識し、授業外でも英語を学んでいることが総じて読み取れる。

これらの回答をまとめると、現在の英語教育は、基礎的な英語力がまだ身に付いておらず英語を学ぶことへのモチベーションが高くない傾向であり、現状は最適とは言えない状態であることが推測される。

3. 英語学習におけるインプットの理論

英語学習において、インプット（言語入力）は第二言語習得の基盤でありアウトプットに先行すべきであ

る事は誰もが認める点である。何かを産出しようとした場合は元の素材がないと出せない。貯金を下ろそうとしても最初から預金がないと下ろせない事と同じである。言語の場合、理解可能なリーディングやリスニングのインプットは、スピーキングやライティングなど他の技能の基盤を形成する。実際はリーディングが最初に学ぶべき柱となり、後にリスニング、スピーキング、ライティング能力の向上にもつながる。読めなければ聞けないし、聞けなければしゃべることは難しい。読めなければ書けないし、書けなければしゃべることは無理であろう。これらはクラッシュエンのインプット理論でも総じて言われていることであり、以下に4技能の相関図を示した図1を示す⁷⁾。ただし筆者らはより正確にわかりやすくするため、同じインプットでもリスニングよりもリーディングに重きを置く相関図も図2に示す。いずれの図もリーディング、リスニングがインプットとなり、その後にライティング、スピーキングなどのアウトプットが習得されるという点では同じである。

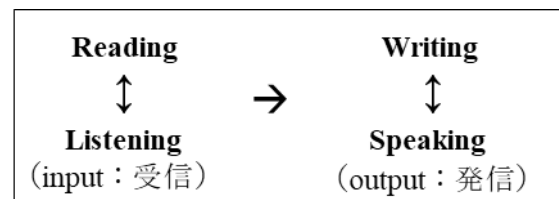


図1. クラッシュエンによる英語4技能の相関図

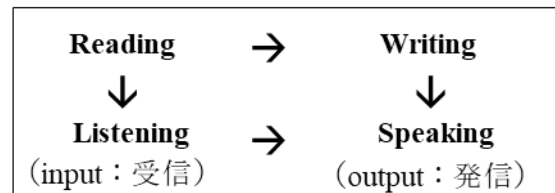


図2. 筆者らによる英語4技能の相関図

3-1. クラッシュエンのインプット仮説：

ここではクラッシュエンによる定義を見てみたい⁸⁾。言語を学ぶという点においてはまず、習得と学習の区別が必要で、習得は自然なコミュニケーションを通して身につけるものであり、学習は文法などの意識的な知識を学ぶことである。そして言語習得においては習得の方がより重要である、としている⁹⁾。言語習得においての要は理解可能な十分なインプットを通じて起こる。インプットは学習者の現在の学習レベルよりも少し難しい(i+1)のレベルが理想的で、内容は学習者にとって興味深く自然なもので十分な量が必要となる⁸⁾。

そしてインプットの内容は文法項目に偏らないものが望ましい。4 技能で述べた場合リーディングとリスニングは特に重要なインプット源となりうる。そして効果的なインプットにも条件があり、クラッシュは理解可能であること (comprehensible)、つまりリーディングとリスニングで与えられるメッセージが十分に理解可能であることにより語彙や文法が習得されやすいとした。そして興味深く自然なものであること (interesting and/or relevant)、文法項目中心に配列されていないこと (not grammatically sequenced)、十分な量であること (sufficient quantity) とされている⁸⁾。また、クラッシュは十分なインプットがあればアウトプットは自然に発生するとしている。具体的には脳内で言語知識のインテイクが促進された後にアウトプットが促進される。ここでインプットとアウトプットの関係を見ておきたい¹⁰⁾。インプットが十分にあっても、(日本語と英語のように) 言語間の距離が大きい場合はアウトプットは難しくなり、インプットとアウトプットをつなぐプラクティス (音読、シャドーイングなど) が必要となる。また習得プロセスを促進させる順番としてインプット→アウトプット→プラクティス→モニタリングのサイクルにより学習者の言語能力が段階的に向上するとし、その繰り返しが効果的である。インプットとアウトプットの関係性についてまとめると、インプットの蓄積がアウトプットを生むがアウトプットにはさらに適切な練習 (音読、シャドーイング) が必要となる。

3-2. 英語学習におけるインプット活動の重要性

前述のインプット理論を援用するとインプット活動は言語の自然な習得において極めて重要となる。日本人英語学習者が留意すべき点としてまず言語間の距離克服がある。日本語と英語のように言語間距離が大きい場合、大量かつ適切なインプットが自然発話や他の言語活動への架け橋となりうる。効果的な学習方法として多読は大変重要である。多読を通じて英語を読むことへの抵抗をなくし読解の喜びを感じることができる。その際、タスクリーディングやインフォメーションギャップ活動を加えた場合、積極的な読みを促すこととなる。また教材としての英字新聞の活用は時事問題への関心を高めリーディングの多読に向いている。

また、リーディングにおける音読の役割を忘れてはならない¹⁰⁾。音読は書き言葉と話し言葉を一体化させるタスクであり、読解力向上はもちろん、インプット効果 (読解力向上、語彙・文法定着) とアウトプット効果 (スピーキング力向上、モニタリング能力発達)

の双方に寄与する。音読は書き言葉と話し言葉をつなぐタスクでありインプットとアウトプットを結果的に結びつける。

加えて大量のインプットを継続するためには学習者のモチベーションを向上させることも必要である。読解を進める際に彼らにとって興味深い教材 (ドラマ、インタビュー、時事ニュース) を使うことで学習意欲が高まり継続的な学びに繋がると思われる。かつ、このような内容重視型の教材選択は洞察力、想像力、批判力を養いアウトプットの機会も結果的には増やすこととなる。

続いて学生たちにとって限られた時間の中どのようにして学習時間の確保をするかも課題となる。日本語母語話者が英語を習得するには、膨大な時間が必要であり、学校の授業時間だけでは明らかに不十分であり、クラス外での英語に触れる環境が不可欠となる。必然的に課外での学習が必要となり授業課題の他には、学内では英語教育センターや国際交流施設の活用、学生の自宅等では NHK のラジオ番組の活用などの取り組みの推進が必要となる。

ここで NHK ラジオの英語講座のメリットについて思いのほか有効であることを記しておきたい。まず講師、ネイティブスピーカー、レギュラーゲストの英語が相互に聞くことができ良いインプット材料になる。そして番組内でリスナーに英文をリピート・音読させ、かつ英作文のコーナーもある。インプットに加えて必然的にアウトプット活動も行うことになるので授業と同じか場合によってはそれ以上の学習効果が望める。また、自律心があれば定期的かつ継続的に学習できる。加えて、授業と違い、自宅などで教師やクラスメイトの目も気にせずに集中できるという点も見逃せない。多くの講座が無料で用意されているうえに一日に何度も再放送が行われている。自分のレベルに合ったものを継続的に聞き続けられよいのである。実際に活用し続けている学生を何回か指導したことがあるが、彼らは総じて英語使用に対して積極的であり、かつ成績もよかった。

効果的な英語学習にはこれらの理論と実践に基づき学習者の興味を引き出し、継続的なインプットを確保する授業や指導、そして環境づくりが必要不可欠となる。

ここで1点、確認をしておきたいのであるが、本稿では英語のアウトプットを軽視しているわけではない。インプットばかりでは学生たちの学習動機や学んだ内容も向上せず、アウトプットという発信がなければ外国語を学ぶ目的であるコミュニケーションたりえない。

本稿の筆者たちは、良質なアウトプット活動をするためには先に良質の大量のインプットがなければ困難である、という本質を改めて再確認したいだけである。

4. 英語教育が効果的でない理由は何か？

日本の英語教育の第一の問題は、言語習得に費やす時間が十分でない事であるとも言われている。まず、日本人にとって英語習得の難易度はどの程度であろうか。よく用いられる資料として米国務省のものが米国¹¹⁾の外交官がさまざまな言語を習得するのに必要な時間を文書にまとめている¹²⁾。それによると、英語母語話者にとって日本語が「最も難しい言語」であり、外交官で 2,200 時間の学習が必要とされている。さらに、平均的な人が習得を目指す場合には、約 4,000 時間ほどが必要だと思われ、ほぼ倍となる¹³⁾。同じように考えると、まず日本の学校教育における英語学習時間は、中学から高校までの 6 年間でわずか 600~700 時間程度である¹⁴⁾。したがって、学校英語教育だけをやっていただけでは英語力が身につかないことが分かる¹⁴⁾。逆に、英語が堪能な人は、授業以外の時間に自学自習した結果であると思われる。つまり、この学習時間の不足が英語力向上の最大の障壁となっていると言って良いであろう。論理的に考えても量なくして質は生まれない、という結論になる。

5. 英語教育者側の課題

近年はオーラルコミュニケーションなどといったアウトプットを重視した教育政策が学習指導要領にあり、それらの研究が盛んである。しかし言語習得の観点からはインプットが先であり、インプットなくして言語産出はありえない。その意義は西澤・吉岡・杉浦¹⁵⁾、メイソン¹⁶⁾、粕谷¹⁷⁾などの論文でも示されている。しかしかつての文法訳読教育などの反省からか日本ではこの重要な点が議論されることはほとんどない。そもそも昔から日本における英語の上級者は、文法、翻訳、多読といったインプットを優先するものであり¹⁸⁾、その成功の鍵は毎日の英文読解、辞書引きの繰り返し、多読、ディクテーションなどの練習にある。教室内外での学習に対するこの体系的なアプローチは 1 世紀以上にわたって英語教育の基本となっていた。現代のようにアウトプットに重点を置いたりするような、教科の習得の本質を見失いかねない、やや非効率的な教育的アプローチを取り入れたりするよりもこうした基本原則を重視することが重要であると考えられる。

次には英語教育関連の研究内容を考えてみたい。それらの成果を積極的に実践に取り入れ、応用することは重要であるが、ただ最新の研究動向にばかり目を向けるのではなく先を見据えた大きな視点を持つことが肝要である。実際、学校のカリキュラムだけでは学生の英語学習時間が不足しているという根本的な問題に対する教育者の認識不足が大きな課題となっている¹⁹⁾。この認識が欠けていると指導の内容や質に大きな影響を与える可能性がある。さらに、英語教育研究の分野では英語学習の最も効果的な方法についてまだ明確なコンセンサスが得られていないということも問題であろう。最近の英語教育研究は教材開発や指導法の改善といった問題に焦点が当てられそもそも日本社会で英語を使う機会が少ないことや英語の授業時間数が絶対的に少ない、といった根本的な問題が軽視、もしくは理解されていないように見える。

ここでは、主に理工系学生に英語を教えている教育関係者のものに限るが、一例として過去 3 年間に発表した論文集 (6 冊、合計論文 66 本) の研究論文の内容を確認してみたい^{19, 20)}。これらの論文ではかなりの割合で「教授法」に焦点を当てており (例えばリスニングに関する特定の Teaching Method、学習者動機など)、言い換えれば各論が多く総論的な論考はほとんどない。前章でも触れたように、日本の英語教育における最大の障壁は、言語的距離によって日本人にとっては英語習得は特に困難で学習時間が不足していること、そのためにはインプットを中心としたかなりの学習時間が必要なこと、そして日常生活では英語を使用せずに過ごせるため、受験勉強などを除いて授業外での自己学習に結び付く事が困難である、ということである。それらの発想に基づく論考が少ないのである。上述内容を理解しながら、それでもカリキュラムの範囲内でできるだけ学生たちの英語力向上のための努力をしている教員がほとんどであろうが、英語教育研究の本質の一つは、いまだはっきりとした結論の出ない英語教育改革への回答である。各自それぞれの専門はあるであろうが、目先の小さな結果だけを追ってはいないだろうか。いわば木を見て森を見ず、のような形で問題の本質を捉えるには程遠い状態ではないであろうか。現状のままではおそらく大きな変化は今後も起こらないままであろう。

6. 現状打破の提案

真の英語教育改革を進め効果を高めるためには、もしくは本当に学生たちの英語力向上を成功させるため

には、まずは英語の授業数を増加させるようなカリキュラムの改革が必要不可欠である。できれば2倍、少なくとも1.5倍の授業時間を確保し加えて特に初期は読解（同時に基礎英文法の強化）・聴解に重点を置いたインプット・ファーストな内容にするべきである。インプットを重視した授業の具体案は、基本英文法指導や語彙力強化とともに「多読」が中心となろう。この学習戦略は歴史的に非常に効果的であることが証明されている¹⁹⁾。多読に関する最近の研究を見ると下記のように様々な相乗効果もある。多読本を用いた指導により大学生英語学習者の英語を読むことに対する苦手意識の改善が見られたという報告²¹⁾や、多読を異なるアプローチで実施した場合に学習者の英語力向上に影響があるかを調査した研究²²⁾、さらに多読教材 Graded Readers での学習が、英語学習者の情意面に影響を与え異文化理解の助けになるという意見もある²³⁾。高専や大学などの高等教育機関においてはその際に英文法の知識伝授や復習も随所で取り入れる場合はなお効果的であると考えられ、正しく活用されればEFL学習に大きな影響を与えるであろう。

また、英語学習に関する課外活動の拡充や、学内に英語専門施設を設置することで授業外での英語への接触をさらに強化することができる。高等教育機関、特に大学では以下のような具体的な方法が有効と考えられる。手っ取り早い方法として専門書や論文をなるべく英語のものを使用することである。最初は苦戦するかもしれないがやがて慣れてくるであろう。すると国際会議への参加や留学などに興味が出て学生自身が自分でもできると自信が湧いてくるであろう。また、英語学習アプリやオンラインサービスなど多様化した英語学習教材の活用も勧められる。その波に乗って英語学習コミュニティへの参加を奨励するのもよい。それらは学習者のモチベーション維持や情報交換、学習方法の共有に役立つ。

このような活動に参加するためにはある程度の基礎的な英語力が必要になり、かつ学生の質にもよるが、最終的には前述のような地道な活動を重ねてゆくしかない。ある程度成功している授業外活動での実践例として、筆者の一人が勤務する工学系の大学の例を見てみたい。この大学では「英語ステップアップポイント制度」によって卒業までの継続的な英語学習を推進している。学生はTOEIC受験や英語関連イベントを通じてポイントを蓄積し、卒業には100ポイントが必須となる。ポイント獲得上位者には海外留学補助金が支給される。iPlazaと呼ばれる英語学習、国際交流の場では会話練習や読書会、講習会やイベントなどを開催し、

語学教育や国際交流を促進している。この場所ではアウトプット活動を行う機会が多く提供され、学生たちの知識定着やモチベーション向上に寄与している。こうした取り組みのおかげで、全国的に理工系学生のTOEICスコアが入学後は低下傾向にある中でも同校の学生の英語スコアは向上しており、授業での不足分がしっかりと補われていることが分かる。つまり他の高等教育機関でもこうした制度を採用できれば同様の効果が期待できることを示唆している。

7. ネイティブスピーカーが主担当となる英語コミュニケーション系授業での扱い

本論ではインプットの重要性を問うているために英語授業では、主として日本人教員が担当するであろう基礎英語や精読、多読系の内容に関する言及が多い。しかし今の時代は高専や大学でもアウトプット活動が主となる英語コミュニケーション系の授業も必要とされ多くの教育機関に設置されている。スピーキング、プレゼンテーション力育成などを主眼としたこれらの授業は科目の特性上、英語ネイティブスピーカーが担当することが多いと思われる。本稿の著者の一人はネイティブであり高専や大学で同科目を長年担当している。そこでこれらアウトプット系が主となる授業においてもいかにインプットの量を増やすかの工夫を見てみたい。以下は筆者の一人が行っている授業内容における心がけである。

大学や高専の英語コミュニケーション授業では自然で意味のある英語に触れる機会を最大化し、双方向的な学習環境を構築することが同科目のネイティブスピーカー教員が行う役目であると考えている。授業内では学生の母国語の使用を極力控え、指示や説明、質問、フィードバックを一貫して英語で行い、語彙や表現を紹介しながらも学生の理解度に合わせて発話を調整することでリスニング力と理解力を高めることを心掛けている。リスニングに関して様々な教材や機会を与え、例として会話やインタビュー、ビデオクリップ、ポッドキャストなどを活用し、多様なアクセントやスピード、文脈に触れる機会を提供している。教材を深く理解するためには、要点の抽出や質問への回答、内容の要約、フォローアップディスカッションといった活動を取り入れ、現時点では効果を上げているように感じる。また、ロールプレイやディスカッション、問題解決型課題などを通じて英語を使用したコミュニケーションの機会を増やし、学生同士の交流を促進させている。

また、授業外ではYouTubeやポッドキャスト、言語学習アプリ、簡単な英語ニュース記事などの利用しやすいリソースを推奨し、授業外課題として軽いリスニングやリーディング課題を課すことで学生が自主的に英語に触れる環境を整えている。さらに英語話者とのコミュニケーション機会を設けることで学生が安心して英語を活用し多少のリスクを冒しながらも積極的に学べる環境を整え学習者の自信を育む取り組みも行っ

ている。このような授業内外の活動を通じ英語インプットとアウトプットの好循環・相乗効果を生み出し学生の総合的な英語コミュニケーション能力を向上させることを目指している。この手法だと授業中、学生は絶えず活動を行うことになり手を抜けないというメリットもある。現時点ではこのようなやり方で学生の総合的な英語力構築の一助となっていると思われる。



写真1. 英語ネイティブスピーカーの授業におけるインプットとアウトプットを融合させた授業

8. 結論

本稿では筆者らが現代の英語教育の主流であるインプットを重視せずアウトプット（コミュニケーション）に重きを置く潮流に疑問を抱き、インプット重視型の授業の提案を試みてきた。それらを実施している筆者らの授業は予習や復習が多くなる傾向があり、モチベーションが低い学生たちにとっては大変であるが何とか継続している。主観的であるがそれらの授業形態では英語力向上という効果が見られていると感じている。今後の課題として量的・質的分析を行い、より客観データをもって英語教育に貢献できればと考えている。また、同じEFL環境であるアジア諸外国（中国・韓国・台湾など）の英語教育カリキュラムを探り、教育環境が違っても何か学ぶべきことがないかを調査することも必要となるであろう。

現状の日本の教育制度は（英語）学習時間の不足、教育者の意識のギャップ、研究の不十分さなどといった英語教育における課題に直面している。これらに対処するためにはカリキュラムなどの抜本的な改革が必要であろう。全国的な英語力の向上には関係者間の連携と英語教育改革への積極的な関与が不可欠である。そしてより質の高い英語教育を実現するためには具体的なアクションプランと効果的な学習方法のさらなる

研究を進めていかなければならない。また英語教育は4技能の育成にとどまらず文化的リテラシーを育み、豊かな感性と知性を育むことも目的としている。ESLとは異なる外国語としての英語という日本の特殊性を考慮すると、現在のアウトプット重視のアプローチでは習熟度の停滞や低下があると思われる。文部科学省は多額の政府予算を支出して改革を続けているが、そろそろ本腰を入れて本当に成果が上がる内容を検討する時に来ているのではないか。今後の改革・改善は英語教育界全体の努力にかかっているとも言えよう。

謝辞

本稿は、公益財団法人大幸財団（2023年度第12回人文・社会科学系学術研究助成事業）の助成を受けています。

注

- 1) 山本知佳、2024.
- 2) 本稿は 2024/33rd International Symposium on English Language Teaching & Learning（台北）の学会発表原稿に加筆修正したものである。
- 3) 国際ビジネスコミュニケーション協会、2023.

- 4) Rebusk, 2003.
- 5) 国際ビジネスコミュニケーション協会、2022.
- 6) Ichikawa, K. & Sainte J. (2024).
- 7) 渡辺時夫、森永正治、高梨庸雄、斎藤栄二、1988, p.42
- 8) Krashen, 1982, p.62.
- 9) Krashen and Terrell, 1983, p.18.
- 10) 門田修平, 2020.
- 11) Foreign Service Institute, 2024.
- 12) Inagaki (2010, p.19.) によると 2,500 時間 (ただしネイティブスピーカー並の語彙力も含んだ場合のレベルだと 5,000~10,000 時間としている)、細田 (2024, p.186.)によると 8,800 時間とされており、幅がある。よって中間的な指標として 4,000 時間程度とした。いずれの場合でも学校英語教育だけではとても到達不可能な時間数である。
- 13) Jones, 2019. 加えて、高専の 4, 5 年生の 2 年間、もしくは大学の 1, 2 年生の 2 年間のおよその英語授業時間数は 180~200 時間であり、それらを加えても 1000 時間には満たない。よって大学や高専を卒業しても自身で英語学習を実施継続しない限り、高いレベルの英語を習得することは不可能である。
- 14) そもそも不思議なのは、英語学習が始まる中等教育において完璧に近いレベルを求めることを目標とする科目は英語だけである、ということである。数学や体育もオリンピックに出場するレベルを教育目標としていない。これは教育政策に反映された英語教育への過剰な期待が混ざり合った結果であり、もともと達成不可能な目標と考えられる。よって中高 6 年間で英語を学習したはずなのに身につけていない、というのは当然である。
- 15) Nishizawa, H, Yoshioka, T & Sugiura, F. 2005.
- 16) Mason, B. 2009.
- 17) Kasuya, K. 2014.
- 18) 江利川、2023.
- 19) Steele & Zhang, 2016.
- 20) ここでの論文は「全国高等専門学校英語教育学会誌」第 41~43 号 (2021~2023 年) の 3 分冊における計 56 本の論文からなる (全て理工系高専における英語教育研究)。それに加えて「中部英語教育学会誌」第 51~53 号 (2021~2023 年) の中で理工系を対象とした 10 編、合計 66 本の論文を研究種別に分類した結果である。
- 21) 釣井千恵、吉田恵子、斎藤倫子、ワーグナー・エイドリアン 2022.
- 22) 宮副紀子. 2022.
- 23) 瀧口美佳. 2022.

参考文献

- 江利川春雄「英語と日本人挫折と希望の二〇〇年」筑摩書房 (2023)
- 門田修平「音読で外国語が話せるようになる科学」SBクリエイティブ (2020)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 (The Institute for International Business Communication) English Usage Survey. IIBC. (2022)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 (The Institute for International Business Communication) TOEIC Program DATA&ANALYSIS 2023. IIBC. (2023)
- 瀧口美佳「英語多読教材の作品舞台に関する研究」『立正大学人文科学研究年報』, 第 59 号, pp.61-69. (2022)
- 釣井千恵、吉田恵子、斎藤倫子、ワーグナー・エイドリアン「学習者の英語学習における 苦手意識の変化 —多読データを用いた一考察」『人間文化研究』, 16, pp. 263-295. (2022)
- 細田眞由美「世界基準の英語力」時事通信社 (2024)
- 宮副紀子「大学一年生の半期における英文の読み方への 1 つの試み—2018 年度の調査に続く「多読」を利用した調査結果」『神戸海星女子学院大学研究紀要』, 第 60 号, pp.59-66. (2022)
- 山本知佳「中高 3 年生の英語力、前年度から向上も政府目標に届かず 文科省調査」朝日新聞デジタル版 (2024 年 5 月 9 日)
<https://www.asahi.com/articles/ASS5832S0S58UTIL023M.html> (2024)
- 渡辺時夫、森永正治、高梨庸雄、斎藤栄二「インプット理論の授業: 英語教育の転換をさぐる」三省堂 (1988)
- Ichikawa, K. and Sainte Julien. Advancements in English Education for Japanese Science and Engineering Students: Insights and Developments. *The Selected Papers from the Thirty-third International Symposium on English Language Teaching and Learning*, ENGLISH TEACHERS' ASSOCIATION OF THE REPUBLIC OF CHINA, 2024. pp.340-350. (2024).
- Inagaki, S. How long does it take for Japanese speakers to learn English? *Language and Culture*. 4. pp.19-29. (2010).
- Foreign Service Institute. U.S. Department of State. Retrieved from <https://www.state.gov/foreign-language-training/> (2024)

- Jones, B. A. The role of English education in Japan. *Memoirs of Learning Utility Center for Konan University Students*, 4, 21-31. <http://doi.org/10.14990/00003355> (2019).
- Kasuya, K. Elementary School English: What Will Not Change and What Will. *The IRLE Journal*, 13, 5-10. (2014)
- Krashen, S. Principles and Practice in Second Language Acquisition, Pergamon Press. (1982).
- Krashen, S. and Terrell, T. The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom, Pergamon Press. (1983).
- Mason, B. The key to Successful English Education Reform: Input Theory. *Shitenmaji University bulletin* 48. 245-270. (2009)
- Nishizawa, H, Yoshioka, T & Sugiura, F. Support for Input-oriented English Self-study: Effectiveness and Limitations. *Japanese Colleges of Technology Education Journal* 28, 523-528. (2005).
- Rebuck, M. The Use of TOEIC by Companies in Japan. *NUCB journal of language culture and communication*, 5, 23-32. (2003).
- Steele, D., & Zhang, R. Enhancement of teacher training: Key to improvement of English education in Japan. *Procedia - Social and Behavioral Sciences*, 217, 16-25. (2016).